

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XII - 7

1985・3

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XII - 7

1985・3

滋賀県教育委員会

財團法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県下の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、ほ場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加し今年度は36遺跡を数えることになりました。

ここに、実施しました発掘調査の報告書を刊行し、広く埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助にしたいと存じます。

なお、今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました25遺跡を9分冊に分けて刊行するものであります。

最後になりましたが、ほ場整備に伴う発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申しあげますとともに、この報告書の刊行にご協力いただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

市 原 浩

例　　言

1. 本報告書は、湖北地方における昭和59年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査の成果の一部である。
2. 調査は、滋賀県耕地建設課の依頼により滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施したものである。
3. 本書には、坂田郡米原町法善寺遺跡、長浜市下之郷西遺跡・永久寺遺跡の3遺跡を収載した。
4. 調査・整理及び報告は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師用田政晴・（財）滋賀県文化財保護協会技師吉田秀則が担当し、文責は各文末に記した。

なお、法善寺遺跡の現地調査及び朝妻城の報告（I－第4章）に際しては米原町教育委員会社会教育課技師中井 均氏に御尽力いただいた。

目 次

I. 坂田郡米原町法善寺遺跡

1. はじめに	1
2. 位置と環境	1
3. 調査の方法とその結果	1
4. (付) 朝妻城跡について	3

II. 長浜市下之郷西遺跡

1. はじめに	5
2. 位置と環境	5
3. 調査の方法と経過	5
4. (付) 長浜市内における「塚」	7

III. 長浜市永久寺遺跡

1. はじめに	9
2. 調査の方法	9
3. 調査の結果	9
4. まとめにかえて	18

図版目次

I 法善寺遺跡

- 図版一 法善寺遺跡調査区遠景（南より）・法善寺遺跡調査風景
- 図版二 朝妻城濠跡（南面）・朝妻城濠跡（東面）
- 図版三 法善寺遺跡T1・T3・T7・T14

II 下之郷西遺跡

- 図版四 大丈擣塚全景（南東より）・法十塚全景（南西より）
- 図版五 大丈擣塚T1・T2, 法十塚T2・T4

III 永久寺遺跡

- 図版六 永久寺遺跡I区T1, III区T1, IV区T1, V区T1
- 図版七 永久寺遺跡II区東半, II区西半
- 図版八 永久寺遺跡II区方形周溝墓（X1, X2）, II区掘立柱建物（B1）
- 図版九 永久寺遺跡II区中央付近, X1北周溝土器群
- 図版三 永久寺遺跡II区X1北西隅周溝土器, X2東周溝土器群, B P1土器出土状況, X1周溝調査風景

挿図目次

本報告所収遺跡位置図

I 法善寺遺跡

第1図 法善寺遺跡トレンチ配置図 2

第2図 トレンチ断面土層柱状図 3

II 下之郷西遺跡

第1図 下之郷西遺跡位置図及びトレンチ配置図 6

(1)大丈郷塚・法十塚位置図

(2)大丈郷塚トレンチ位置及び土層断面図

(3)法十塚トレンチ位置及び土層断面図

III 永久寺遺跡

第1図 永久寺遺跡トレンチ配置図 10

第2図 トレンチ断面土層柱状図 (I~V区) 11

第3図 II区検出遺構図 13

第4図 方形周溝基 (X 1, X 2) 14

第5図 掘立柱建物 (B 1, B 2)・大形土壙 (BP 1, BP 2) 15

第6図 II区X 1(1), P 5出土土器 19

第7図 II区X 1 出土土器(2) 20

第8図 II区X 1 出土土器(3) 21

第9図 II区X 1 出土土器(4) 22

第10図 II区X 1(5), 包含層, BP 1, BP 2, P 2出土土器 23

表目次

下之郷西遺跡

第1表 長浜市内において小字名に「塚」の名称が残る例 8

古墳名に「塚」のつく例



本報告所取遺跡位置図

I 坂田郡米原町法善寺遺跡

坂田郡米原町法善寺遺跡

1. はじめに

法善寺遺跡・朝妻城遺跡は、寺院跡・城跡として周知されている。このたび県営ほ場整備工事（天の川西部南地区朝妻筑摩第2工区）が計画され、両遺跡がその範囲内に含まれたため事前に発掘調査を行なうこととなった。現地調査は昭和59年5月に行なった。

2. 位置と環境

法善寺遺跡・朝妻城遺跡は、坂田郡米原町大字朝妻筑摩に所在する。

当該遺跡の約北400mには天ノ川が西流し、南へ約1km行くと旧入江内湖に至る。旧入江内湖周辺は旧湖岸を中心多くの遺跡が分布し、入江内湖西野遺跡、今江寺遺跡、筑摩湖岸遺跡、礫山城遺跡等があり、遺物も縄文時代から平安時代にかけてのものが豊富である。特に、礫山城遺跡は昨年度から米原町教育委員会による町浄水場建設事業に伴う発掘調査^①が行なわれ、その結果、礫山頂上及び山麓部において主に縄文時代早期～晩期の土器・石器・人骨等が確認され、県内の希薄な縄文土器の資料を補うものとして注目をあびている。

また、上多良・中多良・下多良の集落附近は天ノ川の自然堤防上に立地し、弥生土器・須恵器等の出土が伝えられている。

今回の調査区は、朝妻城跡の東辺にあたり、関連遺構・遺物の出土が予想された。現在、集落の中央部には濠跡と考えられる痕跡が東面から南面に用水路として残り、北面・西面は道路となっている。

3. 調査の方法とその結果

調査は、主に排水路及び道路部分、切り下げ計画部分について2m×4m程度の試掘場（トレーニング）を設定し、遺物・遺構の確認を行なった。その結果に基づき必要箇所については拡張する方針をとった。調査区は、一面が水田であるが、全体に水はけが悪く、水につかれた状態での調査となつた。

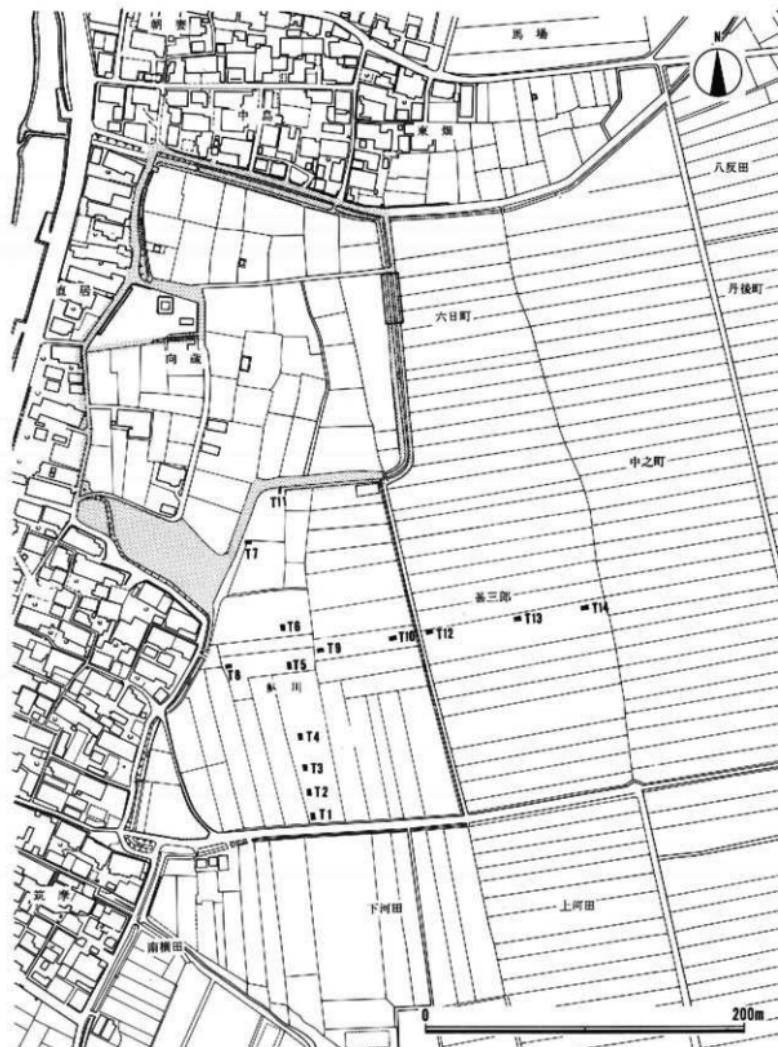
トレーニング設定は、南から北へ、さらに西から東へと行ない、その順序に従ってT1～14とした。

T1～6、8～10、12～14では、0.2～0.3mの表土をめくると、厚さ0.3～0.4m余りの黄褐色土がひろがり、さらに下層には（表面下0.9～1.2m）灰褐色粘土がひろがるのみで、いずれの層においても遺構・遺物の検出は認められなかつた。

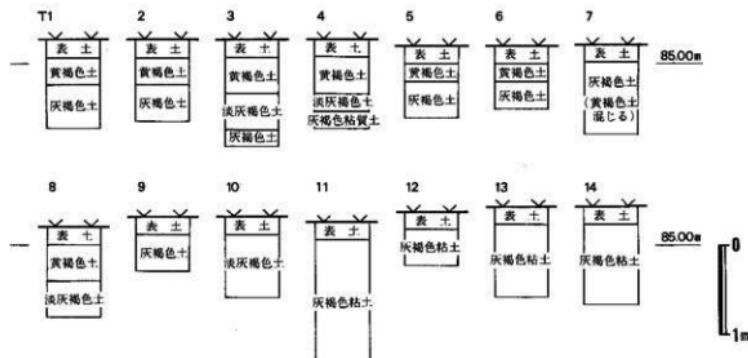
T7、11については特に、濠の外側の掘り方の確認がその目的であった。濠跡は現在も用水路として水をたたえており、そこで、バック・ホーにより一度水をせきとめたあと、再度トレーニングを設ける方法をとつたが、土砂が軟弱な上にヘドロ等の堆積が多くて層位の確認は難しく十分な成果はあげられなかつた。

また、夏季施工工事時に立合い調査を行なった結果、地表下2mまでヘドロが堆積しており、その掘り方や断面は確認できなかつた。遺物も皆無であり、かつ地表下2mまでガラスやビニールが出土しており、濠自体、城跡に伴うものか否か不明である。

（吉田）



第1図 法善寺遺跡トレンチ配置図



第2図 トレンチ土層断面柱状図

4. (付)朝妻城跡について

朝妻城跡は別名中島城と呼ばれ、米原町朝妻筑摩に所在する中世平城跡である。

城跡は中島神社の鎮座する小字「向藏」付近一帯で、浜街道を扼え、要港朝妻港に面した、水陸両交通路の要衝の地であった。

a. 歴史

朝妻城自体に関する文献は皆無であり、その築城始年代、築城者などは不明である。しかし軍事的要衝の地であることより、応仁文明乱時には、すでに城が築かれていたと思われる⁽¹⁾。

天文年間(1532~1554)には、新庄蔵人直昌が修築して、以後居城としていたことが、「寛政重修諸家譜卷第八百二十」に見える⁽²⁾。

この「重修諸家譜」によると、新庄氏は、藤原氏秀郷流と称し、俊名の時に近江国坂田郡新庄(現近江町新庄)に住してより新庄氏を称したとある。俊名より8代、蔵人直昌のときに近江国坂田郡朝妻に城を構えて住すとあり、このときより新庄氏の居城となったのであろう。直昌の子直頼も朝妻城に居したが、後に羽柴秀吉に仕え、天正11年(1583)摂津山崎城(現京都府乙訓郡大山崎町天王山)へ三万石をもって移封された。これに伴い朝妻城は廃城となったものと思われる。

「近江國坂田郡志」⁽³⁾によると、城主直頼のとき、六角定頼の軍に攻められ落城し、一時六角方の属城となつた。しかし浅井長政が六角氏を破り、直頼が再び朝妻城にもどったとある。

以上、後世の文献からであるが、要訳すると、国人新庄氏が築城し、浅井氏配下として在城していたが、新庄氏移封後廃城となったということであろう。

なお新庄氏はその後常陸国麻生藩主として明治まで存続し、直頼までの墓は近江町寺倉の純寧寺にある。

b. 造構

城跡の遺構であるが、山城と違い、平城の場合その痕跡を残すことは少ない。朝妻城も例外ではなく、現在城跡と断定できる遺構は残さない。しかし小字“向蔵”的地は地元で「殿屋敷」と呼ばれており、近年まで南北200m、東西200mにわたって濠が四周をめぐっていたという。この濠は用水路として東面、南面に残存している。この内側、中島神社を中心に50m×50m程の濠がめぐっていたという。のことより朝妻城は複郭の方形館城タイプではなかったかと推定される。

伊賀、甲賀を中心とする単郭方形館城タイプの場合一辺50m内外のものが主流であり、それらに比した場合、大規模なものと思われたが、複郭の場合残存する城郭を見ると、栃木県飛山城跡が330m×450m、岡山県院庄館跡が330m×250m、兵庫県福中城が300m×190m、同県豊地城が350m×200m程度の規模を有している。特に豊地城の場合残存する内郭が60m×60mである。このように見ると、朝妻城を複郭と想定した場合、ごく普遍的な規模であったと考えられよう。

地名では、推定外濠の北に小字“馬場”的地名も残っている。

これらはあくまで現状よりの推定である。今回ほ場整備事業に伴い東側、南側の濠部を調査したが城郭に付属するものか否か不明であった。今後中心部、周辺部をも含めた考古学的調査の成果に期待したい。(中井 均)

- (1) 古野四郎「新庄氏と朝妻城」『ふれ愛』米原町1984
- (2) 続群書類從完成会編「寛政重修諸家譜第13巻」
- (3) 滋賀県坂田郡教育会編「改訂近江国坂田郡志第3巻」1971

II 長浜市下之郷西遺跡

長浜市下之郷西遺跡

1.はじめに

本報告は、長浜市北西部の県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査の成果である。下之郷西遺跡は「昭和55年度滋賀県遺跡目録」には記載されていないが、大丈郷塚・法十塚と称される水田面より一段高い高まりが二つあり、これらが今回の調査対象となった。現地調査は、昭和59年4月に行なった。

2.位置と環境

大丈郷塚・法十塚は、長浜市下之郷地先に所在し、下之郷西集落と森町集落の中間に位置する。北の大丈郷塚と南の法十塚は、160m余り隔たり、約1.6km北を姫川が西流する。

森町集落の西には、森・八角堂遺跡があるが、58年度県営は場整備工事の計画対象となり事前調査を実施した。以前より森遺跡は弥生土器の出土が伝えられ、集落跡の存在が想定され、八角堂遺跡も「八角堂」という字名が残り、礎石の出土が伝えられていた。その結果、6・7世紀の集落の存在とその遺構の検出の可能性を託し、また、9世紀後半の供膳用具の出土をみた⁽¹⁾。

当遺跡より北陸本線を隔てた西約0.6kmには水田中に塚状の高まりのある塚田遺跡があり、遺物が採集されている。

3. 調査の方法と経過

〔大丈郷塚〕

南北9.5m、東西6.8m、高さ0.7mの高まりをもち、頂部は平坦である。9.0×1.0mのトレンチ(T1)、7.6×1.0mのトレンチ(T2)をそれぞれ逆L字形にうがって調査を行った。

T1の土層観察によると、マウンドは上より暗灰色土、暗灰茶色粘質土(5~10cm大のレキを含む)、暗灰茶色土(5~10cm大のレキを含む)からなり、いずれも水平な堆積をなし、最下層の灰色砂利層にいたる。

なお、暗灰茶色土層内には土器の小片が若干含まれ、土師質小皿、自然釉のかかる須恵器片(器種等は不明)1点がある。このマウンドを新たに盛土した際に土中に含まれていたものとみられる。

T2もT1と同様に水平な土層が確認された。

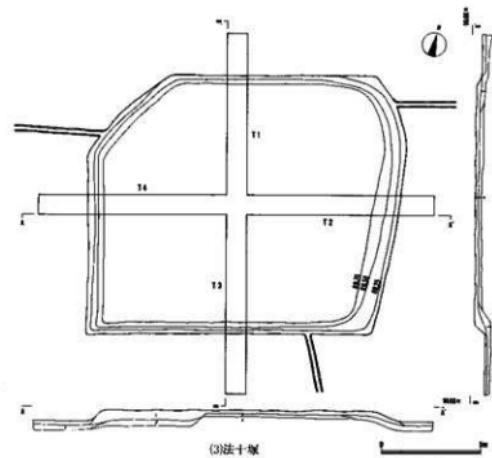
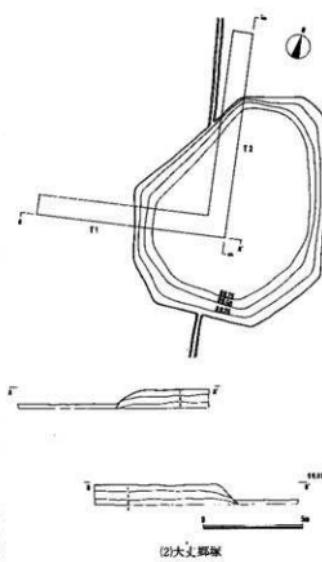
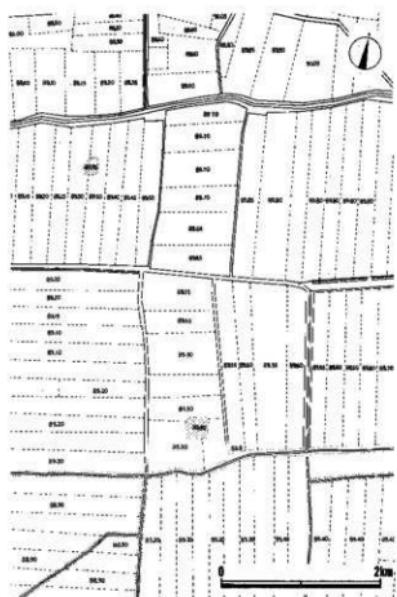
以上のように大丈郷塚は、後世の畑地化に際し、盛土されたものと考えてよかろう。

〔法十塚〕

マウンドは南北13.90m、東西14.50mの方形をなし、高さ0.3~0.5mをはかり頂部は平坦である。

トレンチは十字形に設定し、北から東へT1~4とする。T1は9.0×1.0m、T2が9.4×1.0m、T3は9.0×1.0m、T4が9.4×1.0mをはかる。

T1、3では、最下層の灰色砂利層が南北12.4m、高さ0.4mの高まりをもち、その上面に暗灰茶色粘質土(厚



第1図 下之郷西遺跡位置図及びトレンチ配置図

さ0.16m)が水平に堆積する。またマウンドの傾斜部から水田下にかけて厚さ0.20m余りの灰色粘土層がひろがる。さらにマウンド部のみ暗茶灰色土が認められる。

T 2・4でも同じく灰色砂利層が東西10.4m、高さ0.48mの高まりをもつ。なお、T 2~4において傾斜部の灰色砂利層中に炭化物が多量に認められた。

法十塚においても最下層の砂利層に高まりがみられたものの遺物等も出土せず、大丈郷塚と同様、後世の盛土によるものと解釈してよかろう。

(吉田)

4. (付)長浜市内における「塚」

ここでは「塚」の付く古墳の名称は、小字名に起因するのではないかと考え、長浜市内に残る「塚」の付く小字名について簡単な検討を試み、まとめにかえたい。

「塚」という用語は、「築く(つく)」にその語源があるといわれ、人工的な本質をもつ盛り上げられた土石の高まりを示す^①。その性格としては、古墳の名称にあらわされているように(たとえば、王塚・大塚・車塚・銚子塚)主に基に関連するものが多い。また、仏教的な遺物の発見により仏教的性格を帯びたもの(経塚)、伝承や習慣による民俗信仰に関連するものなどがある^②。その起源については一般に鎌倉時代にはじまるとされているが、古墳以外の「塚」についての研究は、希薄であるといえる^③。

さて、長浜市内に残る小字名のうち「塚」という名称のつくものを表1にあげてみた。名称の重複しているものを多いものからあげてみると「塚町」14例、「石塚」の8例、「塚越・塚ノ越」6例、「狐塚」5例などである。古墳として遺跡であることの判明しているものは9例にすぎず、逆に古墳名に「塚」の名称が使われるが、小字名とは一致しないものは12例にのぼる。

また、現状の状況から比較しても「塚」の名称の残る小字の区域に必ずしも人工的な盛土が存在するとは限らず、逆にその数は少ない。

今回の調査対象となった大丈郷塚・法十塚にしても小字名にその名ではなく、その名の由来もはつきりしていない。単に盛土の存在に起因するのかもしれない。

このように「塚」についての資料はとほしく、その追求は非常に困難である。地元の伝承や習慣といった民俗学的な面に頼らざるを得ないのが現状である。

(吉田)

(1)田中勝弘「長浜市森・八角堂遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』IX-1 1984年

(2)古野清人・大藤時彦「つか」(21頁)『世界大百科事典21 ツーテン』平凡社 1972年

(3)狐塚(田の神の祭壇としてつくられ、キツネを田の神の使者とする信仰に発する)、十三塚(一つの場所に大小の塚が供養塚として残る)等。

(4)集成的な文献として大場盛雄「歴史時代における「塚」の考古学的考察」『末永先生古稀記念古代学論集』1967年がある。

第1表 長浜市内において小字名に「塚」の名称が残る例

小字名	所在地	現 状
1 枝 塚	三ツ矢町	宅地
2 塚 町	口分田町	水田
3 西 塚	口分田町	水田
4 南 塚	〃	〃
5 東 塚	〃	〃
6 上 石 塚	今 町	〃
7 石 塚	〃	水田
8 塚 越	〃	水田
9 塚 町	〃	〃
10 下 石 塚	〃	〃
11 三十日塚町	保 田 町	水田
12 狐 塚	小 沢 町	〃
13 塚 ノ 越	新庄中町	水田、墓地
14 塚 田	〃	塚田古墳(円墳)
15 塚 町	八幡中山町	水田
16 榆ノ木塚	〃	水田、烟
17 西 塚 町	相 摂 町	宅地
18 塚 本 田	水 田	水田
19 塚 森	〃	水田、林(盛り土あり)
20 塚 町	大 戸 亥 町	水田
21 塚 町	平 方 町	塚町古墳(円墳)
22 南 長 塚	高田町	水田、烟、宅地 長塚古墳
23 北 長 塚	〃	水田、宅地 (円墳、消滅)
24 塚 町	永久寺町	水田
25 塚 町	今 川 町	
26 東 石 塚	宮 司 町	水田
27 石 塚	〃	烟、宅地
28 西 石 塚	〃	〃
29 塚 町	〃	烟
30 灰 塚	〃	〃
31 塚 田	〃	〃
32 塚 町	小 堀 町	小堀北古墳(円墳)
33 石 墳 加 納 町		石塚古墳(円墳)
34 狐 塚	〃	水田
35 越 前 塚	〃	越前塚古墳(前方後円墳)
36 狐 塚	新 栄 町	水田
37 塚 ノ 越	〃	〃
38 石 塚 立	〃	水田、宅地

小字名	所在地	現 状
39 塚 町	〃	水田
40 塚 ノ 越	南小足町	
41 塚 町	〃	水田、烟
42 塚 立	堀 部 町	宅地
43 西 之 塚	〃	水田
44 神 塚	垣 龍 町	〃
45 小 塚 町	〃	〃
46 塚 町	春 近 町	〃
47 砂 塚	東上坂町	〃
48 石 塚	〃	〃
49 南 大 塚	西上坂町	大塚古墳(円墳)
50 上 大 塚	〃	
51 小 塚 町	〃	水田
52 狐 塚	千 草 町	〃
53 小 塚 名 越 町	〃	〃
54 塚 町	常 喜 町	〃
55 平 塚	〃	水田、杉林
56 赤 塚	鳥羽上町	赤塚古墳(円墳)
57 狐 塚	八 条	狐塚古墳(円墳)
58 平 塚 前 加 田		水田
59 塚 ノ 腰	〃	水田、林
60 西 塚 ノ 腰	〃	〃
61 塚 町	〃	水田

古墳名に「塚」のつく例(小字名と一致しないもの)

古 墳 名	小 字 名	墳 形
1 岩 町 塚	坂 海 道・大 将 军・中 長	円 墳
2 北 山 塚	関 戸	〃
3 ミコシ 塚	近 江 田	〃
4 丸 岡 塚	天 神 前	〃
5 松 塚	六 郎	〃
6 梅 塚	宮 ノ 内	〃
7 上 蔦 塚	西 柳 滝	〃
8 塚	五 反 田	〃
9 馬 塚	北 屋 数	〃
10 馬 塚	水 打	〃
11 四 ツ 塚	機 本	〃
12 三 の 宮	軍 上	前方後円墳

III 長浜市永久寺遺跡

長浜市永久寺遺跡

1. はじめに

永久寺遺跡は、長浜市永久寺町に所在し、以前から現在の集落北東部を中心に弥生時代の遺物が散布し、また、北西部の大辰巳遺跡と共に弥生時代前期から古墳時代前期までの土器・木器類の出土する遺跡として知られる。

昭和56年度、57年度と継続して集落南部および南東部一帯がほ場整備事業の対象となり、事前に発掘調査を実施している。いずれも排水路および掘り下げの予定されている部分にトレンチを設定したが、昭和56年度の調査では、集落南部にて自然流路と考えられる溝状構造を検出し、弥生時代後期の土器・木器を包含していた。また、昭和57年度には遺構等は検出されなかったものの平安時代後期に位置付けられる土器が出土している。

このように部分的にではあるが、永久寺遺跡の様相が途々に解明されつつある。

本年度もひき続き、ほ場整備事業の対象となり、集落の西部および東部において発掘調査を行なうことになった。これまで明瞭な遺構は確認されていなかったが、今回の調査では方形周溝墓・掘立柱建物等が検出された。

現地調査は昭和59年4月21日～26日、7月9日～8月7日の二度に分けて行なった。

2. 調査の方法

調査は、ほ場整備工事による排水路計画部分及び切土計画部分についてトレンチ（試掘壠）を設定し、遺構の有無、遺物包含層の有無等を確認した上で必要に応じてトレンチの拡張を行なうという方針をとった。

調査区は、I～V区に分ける。I区は集落西部の排水路計画部分でT1～20を設定、事業計画区北部の畠地をII区としT1～3、県道をはさんだ南東部のIII区はT1・2、長浜南中学校東部をIV区としT1・2を設けた。さらに東側の五井戸川幹線排水路沿いをV区とし、T1～7を設定した。

なお、II区については周囲の水田面より一段高い畠地で須恵器・土師器・灰釉陶器等の遺物が散布しており、遺構の存在が予想されたため裾部及び盛土中央にトレンチを設定し必要に応じて畠地の全面調査を行なう予定であった。

3. 調査の結果

(1) I、III～V区

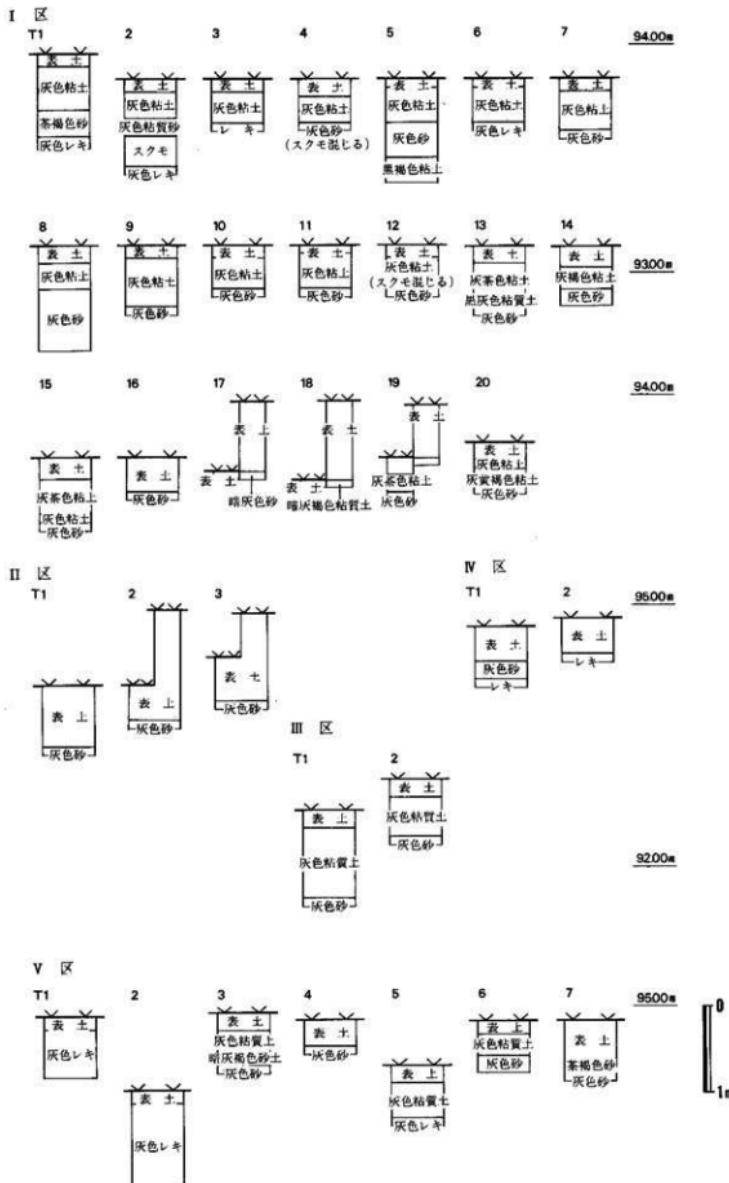
I区は、永久寺集落の西部の田畠地で $2 \times 4\text{ m}$ 規模のトレンチを排水路計画部分に10mおきに設定した。T1～20の土層観察によると基本的には、上より耕土、灰色粘土層、灰色砂、砂礫層となり遺構の確認されたトレンチはなかった。なお、T9の灰色粘土層内より弥生土器片2点、近世陶器片1点が出土している。

II区については、畠地の高まりが古墳の墳丘の残存かと予想されたので、まず、周濠の確認の意味で周囲にT1～4を設定した。ところが、高まりは耕作土による盛土であり、その下層に水平な灰色砂層が広がるのみであった。

また、盛土の中央に設定したトレンチにおいては掘立柱建物の柱穴とみられる遺構を検出したため、全面調査

第1図 水久寺遺跡トレーニング配置図





第2図 トレンチ断面土層柱状図(I ~ V区)

をすることとし、その結果については後述する。

集落南東部のIII区では、T 1・2 を設けたが、I 区と同様の土層堆積を示すのみで遺物・遺構等は検出できなかった。

IV区は、長浜南中学校の東部にあたり、かつてプール建設に際し、弥生土器片が出土したことで知られ、遺物の出土を予想したが、耕土下にレキ層が広がるのみであった。

さらに、東側のV区は、昭和58年度の調査にて溝状遺構・遺物（弥生時代後期）を検出した五井戸川幹線排水路対岸にあたるが、今回は何ら検出されなかった。
(吉田)

(2)II区

II区において精査を行ったのは、長浜南中学校の西側にあたる、周囲の田面より約60~70cm高くなった畠地部分で、東西約60m・南北約25mの不正方形に南へ幅22m・長さ約10mの張り出しが認められている部分である。

畠地上に須恵器片が散布していたため、試掘溝を入れたところ、高まりは全て畠地化のための盛土で、須恵器片と若干の弥生土器片が盛土中に混在していた。盛土も除去すると掘立柱建物（B 1）が検出されたため全面発掘に切り換えた。なおこの畠地の南西に径約4m・高さ約1.5mの塚状遺構が在ったが、人工的な盛土からなり、古墳等とは認められなかった。

盛土を除去すると弥生時代後期の方形周溝墓2基、平安時代末～鎌倉時代初頭と推定される大形土塙・掘立柱建物2棟、それに時期不明の土塙と畠地耕作に伴う溝が数条検出された。

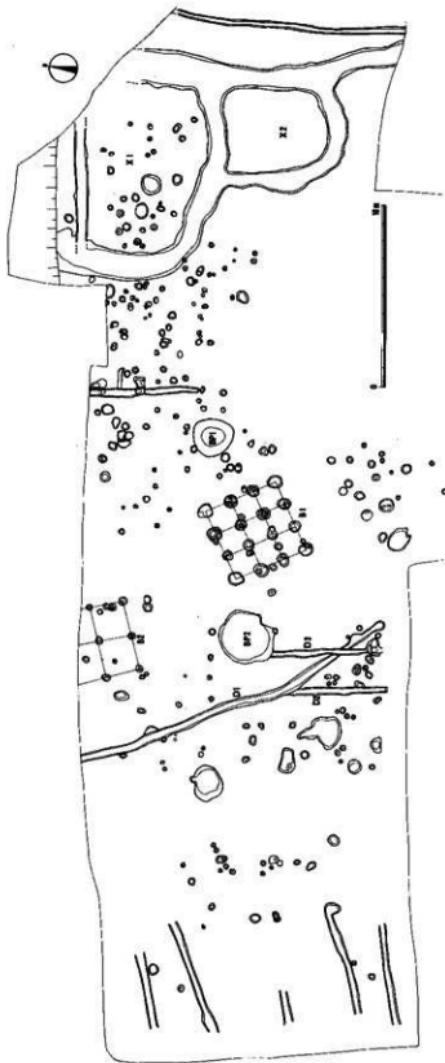
墳丘がすでに前平されていた2基の方形周溝墓は一部溝を共有し、埋土もほぼ均一でいきに埋められた状況を示しているため、その先後関係は明らかでない。X 1と称したもののは幅1.0~1.4m・深さ約0.3mの扁平逆台形の断面を呈した周溝を含めると、東西13mを計り、南北は北側が削平されているものの同程度のものである。またX 2はX 1と同規模の溝を含めて東西7m・南北7.8mを計り、溝は南東隅から更に南へ伸びている。主としてX 1の周溝内からは3群に大別される土器群が検出されたが、溝内にほうり込まれたような状況とその器種の内容等から、集落での廐棄品と判断し、墓に伴うものはX 1の北西隅溝内に正立していた盞1点（第10図10）のみであった。

B 1と称した掘立柱建物は3×3間で、柱間1.30~1.45mを計る平面正方形の建物である。最大の柱掘り方は径70cm・深さ55cmあり、主軸はN-62°-Eを指す。

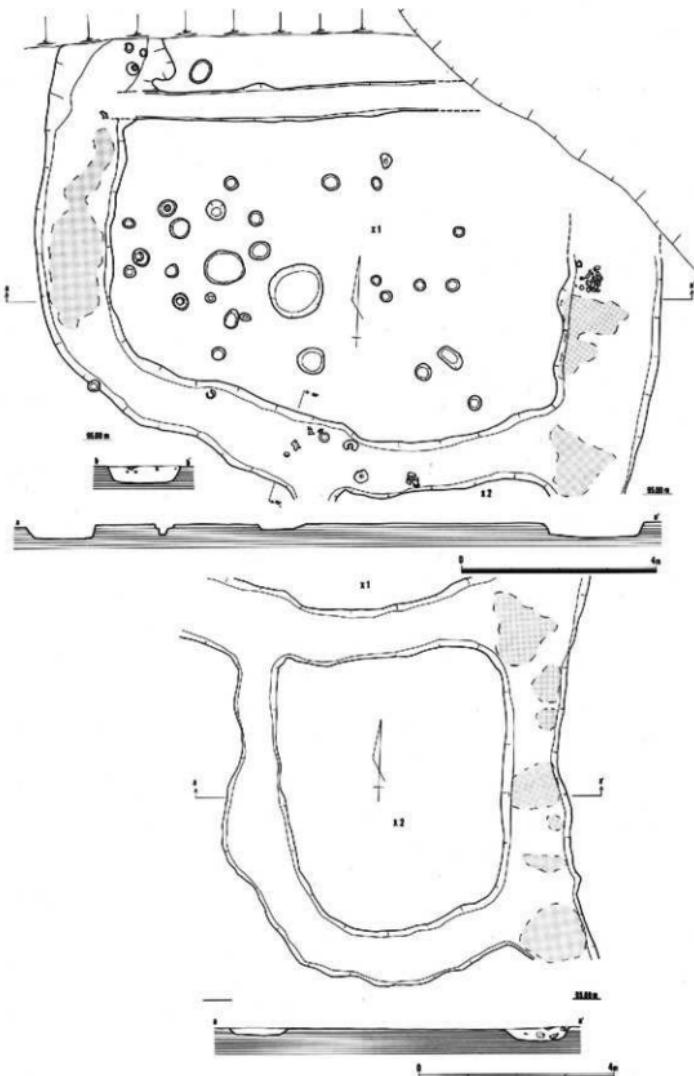
B 2は調査した範囲内では1×2間で、柱間は1.85~2.00mを計る。柱掘り方はB 1より小さく、径約40cm・深さも30cmほどである。B 2の主軸はB 1より13度東にずれる。なおB 1・B 2の年代はBP1底出土の土師器皿、および建物の周辺から出土した山茶塙により平安末～鎌倉時代初頭と推定した。

BP1は東西2.10m・南北2.20m・深さ0.52mの円形土塙である。すり鉢状になった底より完形の土師器皿が2点検出された（第10図16）。

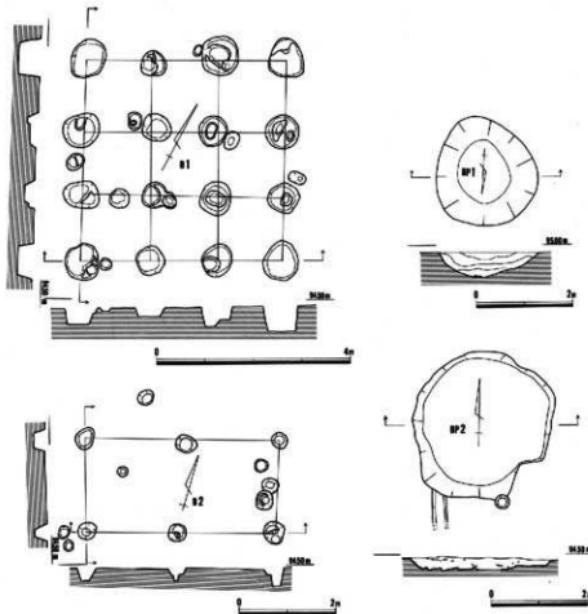
BP2は径約2.90mの不正円形で、深さは約20cmと浅く底は凹凸が激しい。埋土内からは弥生土器の細片が検出されたが、畠地化に伴う盛土にも弥生土器片は混じり、この調査区内の畠作溝からも細片は出土するため、時期は判断し得なかった。
(用田)



第3図 II区検出組織図



第4図 方形周溝墓(X1、X2) アミは土器群



第5図 掘立柱建物(B1, B2) 大形土壙(BP1, BP2)

出土遺物

出土遺物はX 1・2内の多量の弥生土器群の他に須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶碗、石器があり、それぞれの形態・調整等の特徴について述べる。なお、弥生土器の出土量は非常に多量であるが、今回は紙面の都合上、代表的なものに限り、統計的操怍はひかえ別に機会を得て残りの資料を公表したいと考えている。

弥生土器

(X 1・2 土器群)

【壺】

壺は形態的にバラエティに富む。第6図1・2第10図10は受口状の口縁を有するもので頸部が長くのび、口縁部外面に刺突列点文が施される。なお、1の頸部外面には沈線が巡る。第10図10は中位に最大径をもつ体部にまっすぐ立ち上がる受口状口縁を有する。口縁部はナデ、体部はハケによって仕上げ、体部下位に焼成後の穿孔が認られる完形品である。3～6は口縁部が外方へ大きく開く広口壺の類であり、端部が垂下するもの(3)、面をもっておわるもの(4・5)、単に丸くおわるもの(6)がある。6は他にくらべ肩があり張らず、長調の体部を有すると思われる。

7はいわゆる東海系のパレススタイルの壺の特徴を備えたもので口縁端部を垂下させ、外面には櫛描沈線文・棒状浮文が施される。肩部には刺突列点文で装飾された突帯文があぐる。

8・9は口縁部が直立気味に短くのび、8は外面がヘラケズリ、内面ハケ調整を行ない9は内面にやや凹面をもつ。

10は長頸壺の類に属す。

11は口縁部のみが短く直立して外面に凹線文が施され、一見受口状風を呈する。日本海系の流れをくむものであろうか。

12・13はそろばん玉形の体部に細頸の口縁部が付くもので外面を細かい丁寧なヘラミガキで仕上げる。12は完形品で13は肩部に突帯文があぐり、体部下位には焼成後の穿孔が認られる。

(窓)

窓はいわゆる近江型の「受口状口縁」窓を中心にくの字状口縁窓、日本海系・東海系のものが認められる。

第6図16・17が「受口状口縁」窓で口縁部外面の施文はみられず、体部外面の斜行子状のハケ調整が残るのみである。共に端部が大きく外方に突出される。

18・第7図1は口縁部の立ち上がりがゆるやかで「受口状口縁」窓の垂流かと考えられるもので、外面には簡略化された刺突列点文と平行直線文が施される。また、3～6は頸部が長くのび、端部のみが短く立ち上がるもので湖北地方では比較的出土例の多いものである。外面の施文も本来の「受口状口縁」の特徴を踏襲している。体部は肩があまり張らずなだらかな曲線を描く。2もこの形態に似るが、内外面はナデ調整によるもので施文は認められない。

7・8は口縁部がやや内弯気味にのびるもので、特に2は頸部の接合部分を内外面から粘土で充填している。

9・10・11は口縁部が直立し、深めの口縁帯を形成する日本海系の影響をうけた形態とみられる。10・11の体部内面にはヘラケズリが残る。余呉町坂口遺跡では比較的多くの類例が認られる。

第8図1～6はくの字状口縁を有する窓で1・2は完形品である。1は口縁部が外上方へまっすぐのび、体部下位に張りをもつ丁寧なつくりの小型窓である(外面下位はヘラケズリ)。2は内外面をハケで仕上げ、八の字状に開く高台を付する。5は2と同様に高台を付する窓になるかもしれない。

なお、第7図13～15は窓底部に接続する高台片である。

(高坏)

第8図6は口縁部と受部との境に段をなし口縁部が極端に外反するものでやや小ぶりである。口縁部内面に2条の沈線が施され、外面をヘラミガキで仕上げる。7は口縁部の外反が大きく8は口縁部が直線的に開き、坏部の深いものである。また、9は磨滅のため表面調整は不明であるが、口径が小さく口縁部が直線的に開くもので高月町唐川遺跡VI区3号住居址出土の高坏Cに類似している。東海系の影響をうけたものであろう。

高坏16は稜をもたず大きく聞く坏部に八の字状に聞く脚部が付くもので弥生時代後期～庄内式併行に出現する塊形の坏部を有する形態に先行するものと思われる。外面はハケ、内面はヘラミガキで仕上げる。

第9図1・2はいわゆる東海系の欠山式の特徴を満たす高坏で、坏部は深く大きく脚部が内弯気味に聞く。坏部の聞き具合からみてやや新しい様相を示している。

〔器台〕

7～9は直線的に開く坏部と大きく八の字状に開く脚部が稜をもってつながるもので口縁端部が面をもっておわるか、あるいは丸くおわるもの（7・8）、上下に拡張して外面に凹線がめぐるもの（9）に細分される。9の脚部には2段ずつ3方向に円孔が施される。この形態は長浜市大辰巳遺跡・鶴田遺跡等に類例がある。受部と脚部との稜の明瞭化、脚部の発達が時間的経過としてとらえられ、それは7から8への変化とみられる。8・9の形態は当遺跡の器台に占める割合が比較的高く、東海地方との交流を示唆するものである。

10は坏部と脚部との境に稜をもち、筒状の脚部は八の字に開いて端部内面がわずかに肥厚しておわる。脚部外面には直線文が残る。

6は直線的にひろがる受部の端部に口縁帯がめぐり、脚部には2段3方向の円孔が穿たれている。

〔鉢〕

第9図12、第10図1～3は受口状口縁を有する鉢で第10図1は他にくらべて口縁部の立ち上がりが比較的しつかりしている。いずれも体部の形が扁平であり、内外面はハケで仕上げる。1～3は外面に刺突列点文が施されるが雑である。

第9図11、第10図4は底部に穿孔のある鉢で畿内では普遍的である。

〔BP 2〕

小型の台付鉢である第10図5は受口状口縁をもち外面に非常に雑な刺突列点文、直線文、波状文が施される。

〔包含層〕

包含層内からの出土は第10図6～9がある。6の字状に開く薄手の高台片であるが、第10図5のような小型鉢につながるものであろう。8は直線的にのびる受部の端部が垂下し、外面に凹線文が施される器台で第9図9と同形態である。7はくの字状口縁を有する壺で口縁部内面にわずかな凹面をなし、球形の体部につながる。外面はナデ、内面はハケで仕上げる。高壺9は坏部口縁部が直線的にのび、内外面をヘラミガキ調整する。

〔須恵器〕

包含層内からの出土であるが壺蓋1点がある（第10図11）。扁平な宝珠形のつまみを有し、天井部は平らで口縁部は断面三角形につまみ出されておわる。天井部外面のみヘラケズリのあとヨコナデによって仕上げるが、他は全体にヨコナデ調整である。

〔灰釉陶器〕

14は丸みをもち内面にわずかな稜の認られる高台をもつ。

〔山茶壺〕

掘立柱建物B1の時期決定の要素になりうるP2出土の山茶壺（第10図12）は直線的に開いて端部は丸く終り、口径17.7cm、器高5.3cmを計る。断面三角形の扁平な高台を付し、底部外面は回転糸切りが認められ、胎土は粗く内

面には淡緑灰色の釉が施される。また、BP 1 埋土内出土の小皿(13)は平坦な底部から直線的に広がるもので底部外面の糸切り以外はヨコナデ調整である。内面には淡緑灰色の釉がかかる。

〔土師器〕

BP 1 の底より出土した小皿(15)・中皿(16)があり、いずれも表面の磨滅が著しく調整等は観察し難いが、口縁端部をナデによりつまみ出しておわる。

(吉田)

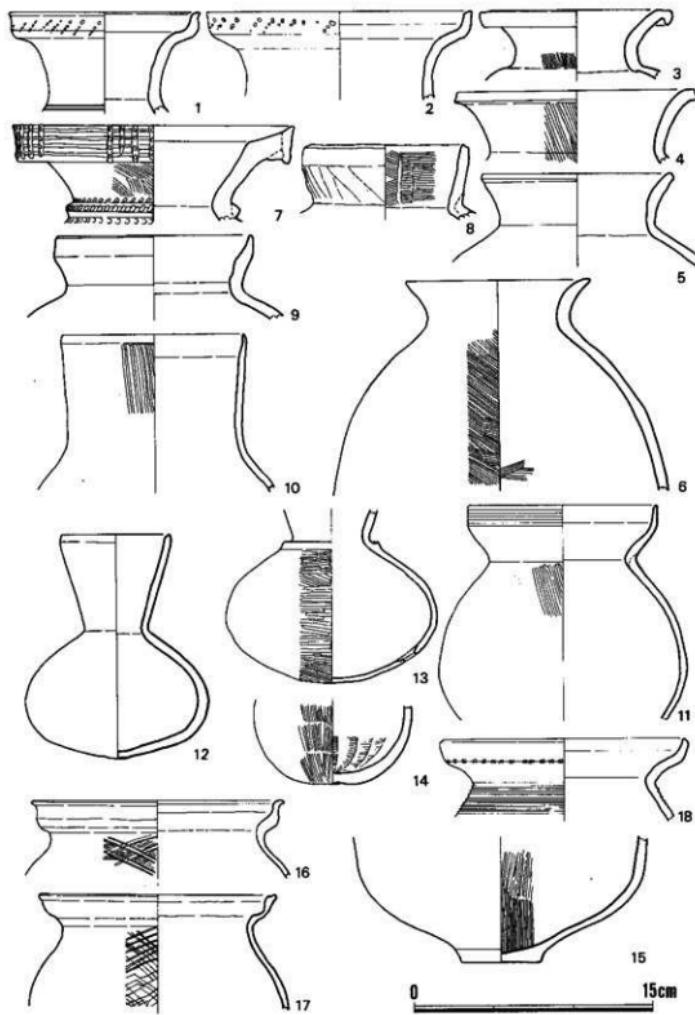
4.まとめにかえて

今回の調査では、比較的遺構検出例の少なかった長浜平野において方形周溝墓、掘立柱建物跡の検出をみたが、残念なことに遺構検出できた畠地は部分的に存在したにすぎず、周囲の水田は一段低いためにすでに削平をうけている。

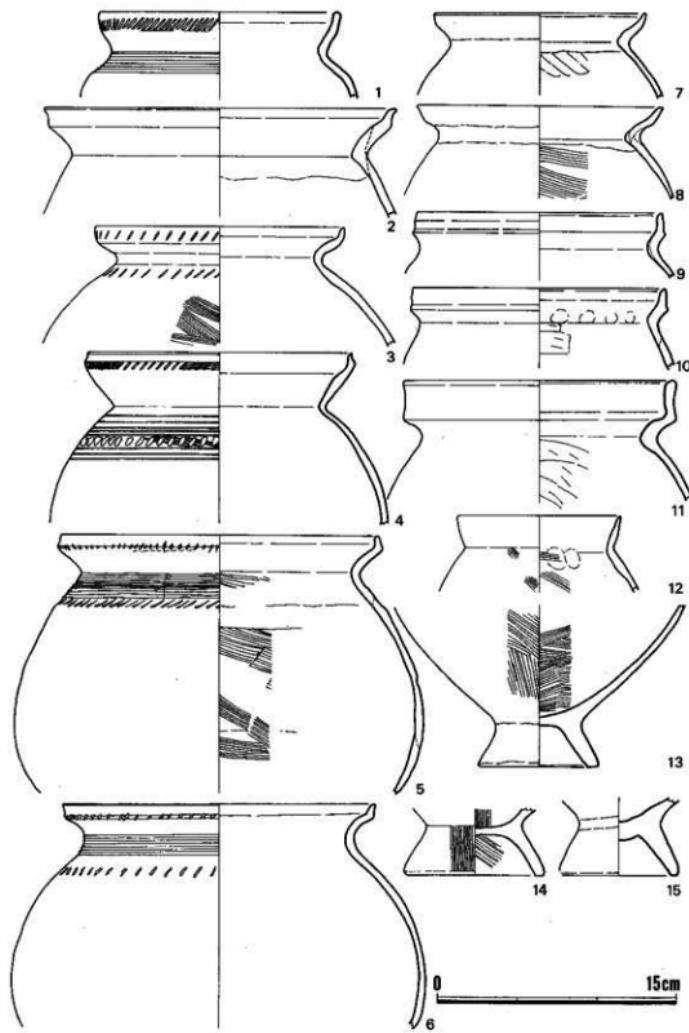
ただ、周溝内から出土した弥生土器群は、先にも述べた通り出土状況、出土量、器種構成等からみて直接、墓に供獻されたものとは考え難く、この地域に弥生時代の集落が営まれていた可能性を示唆している。(吉田)

上述のように今回の調査で、弥生時代後期遺構面のレベルが周囲の現水田面とさほど変わらないことが明らかになった。これまでの長浜平野の、特に水田中における埋蔵文化財調査では、明瞭な遺構は認められず、包含層中や溝等の落ち込みから遺物を検出すことが多かった。このことは少くとも弥生時代以降、堆積の度合いが少く、集落等の遺構の多くは水田として削平を受けたが、微高地の現集落と重複していることが予想される。

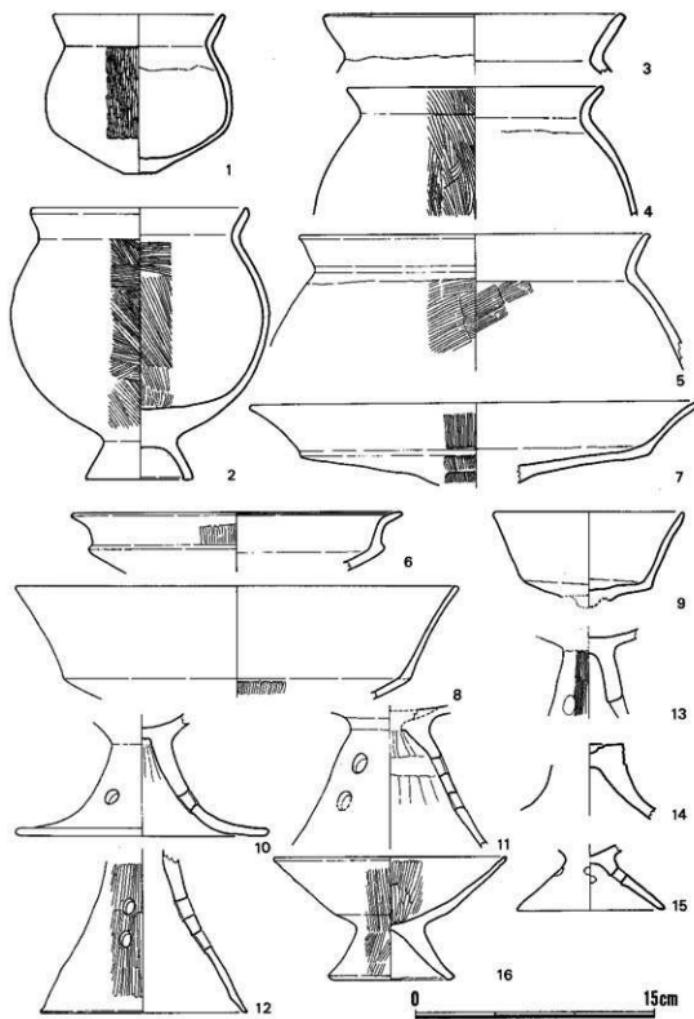
また今回のII区は永久寺と大辰巳の字境に接しており、本来は著名な大辰巳遺跡に含められるべきものである。出土資料の多くは弥生時代後期後葉の一群であるが、いわゆる庄内式との間にはまだ隔たりがある。昭和59年度の大辰巳遺跡調査の報文(「県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書」II-3, 1980)に基くと、1~3期に相当するだろう。(用田)



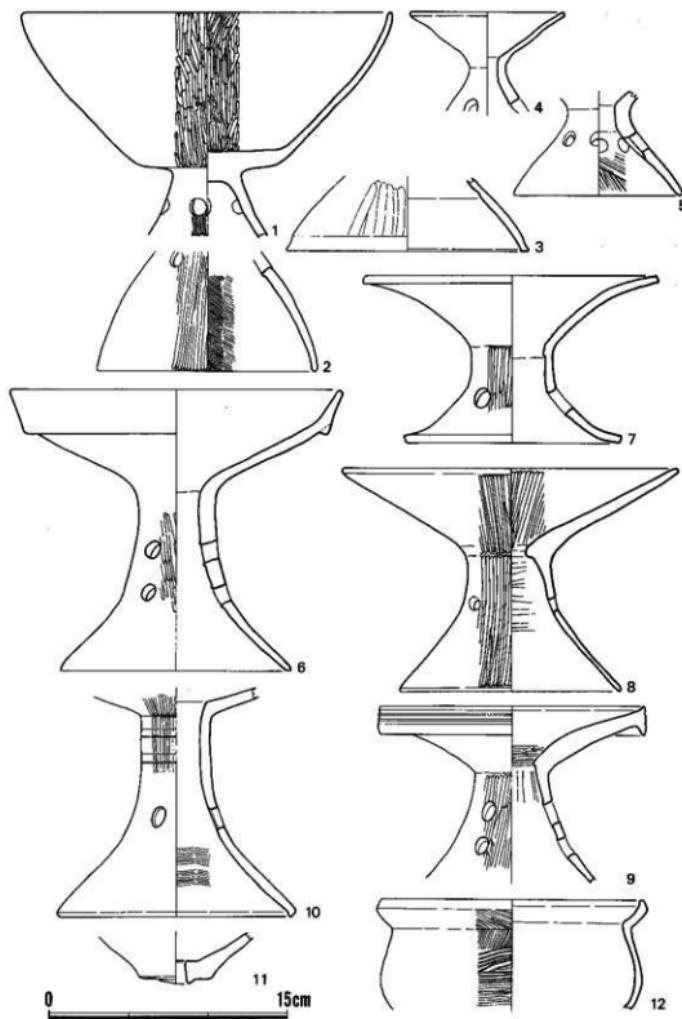
第6図 II-X1(1)、P5出土土器



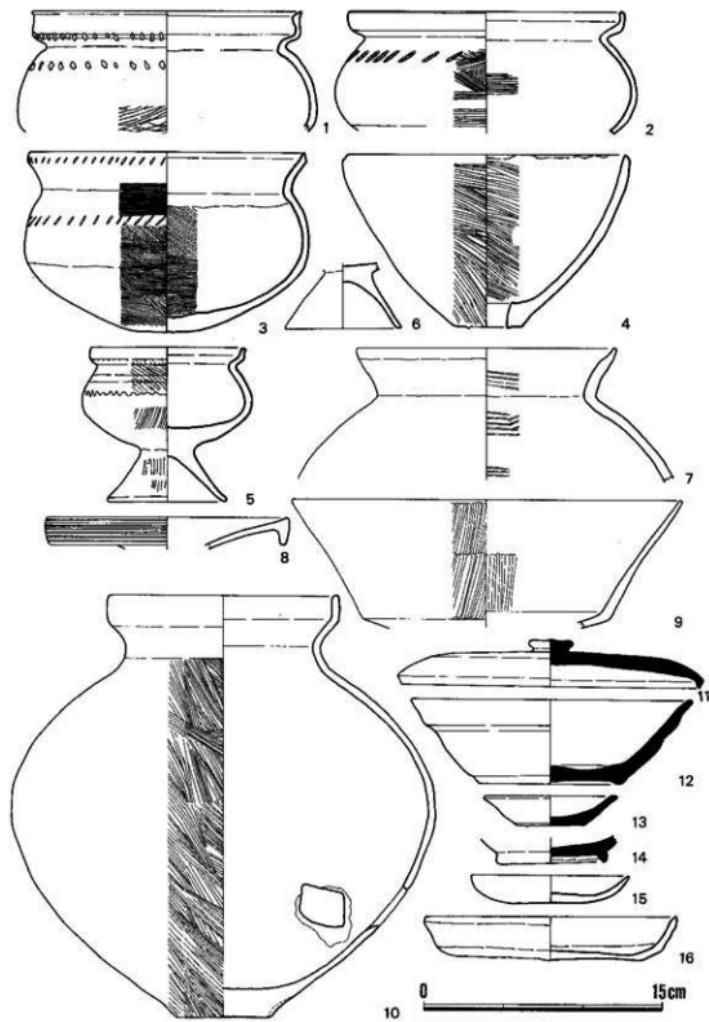
第7図 II区X1 出土土器(2)



第8図 II区X1 出土土器(3)



第9図 II区X1 出土土器(4)



第10図 II区X1(5)、包含層、BP1、BP2、P2 出土土器

図 版



法善寺遺跡 調査区遠景(南より)



法善寺遺跡 調査風景



朝妻城 漢跡(南面)



朝妻城 漢跡(東面)

図版三 法善寺道跡





大丈都塚 全景(南東より)



法十塚 全景(南西より)

圖版五
下之鄉西遺跡



大丈鄉塚 T1



大丈鄉塚 T2

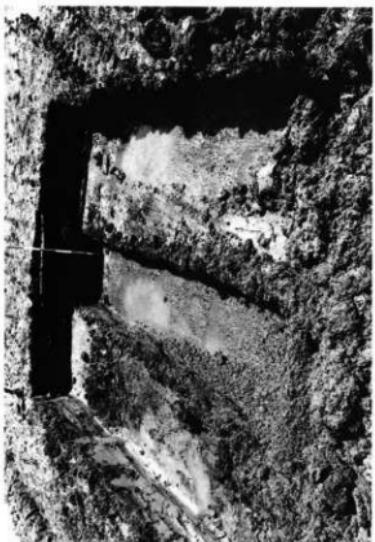


法十塚 T2



法十塚 T4

図版六 永久寺遺跡





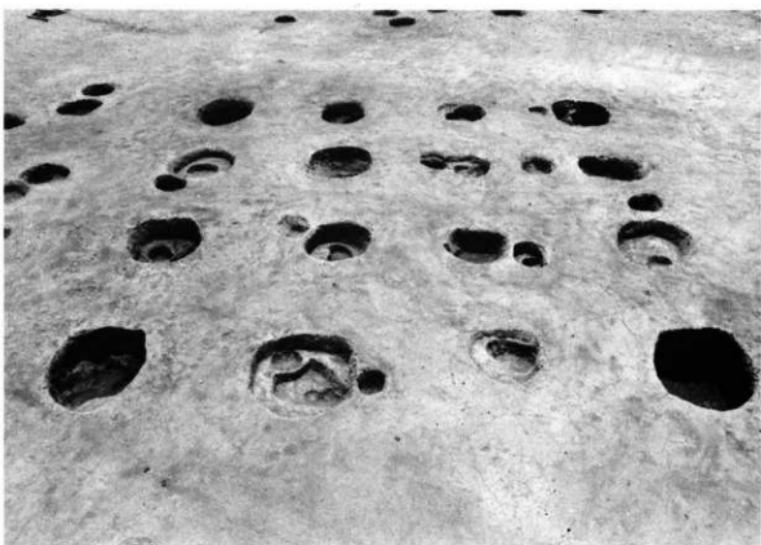
II区東半



II区西半



II区 方形周溝墓(X1, X2)



II区 掘立柱建物(B1)



II区 中央付近



X1 西周溝土器群

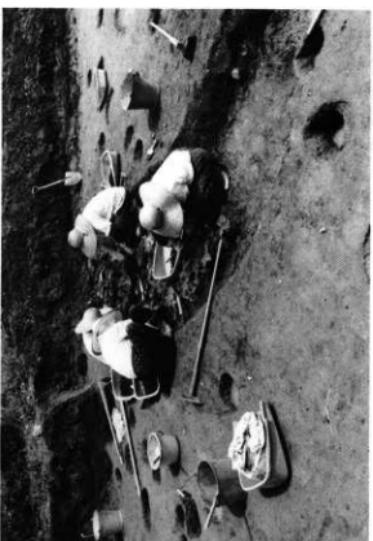
X2 東面溝土器群



X1 北西隅屬溝土器群



B1 土器出土狀況



昭和60年3月30日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告 X II-7

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
財團法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 真陽社